

拝見！医師の一日

国立国際医療研究センター国際医療協力局
運営企画部 保健医療開発課長

蜂矢 正彦^{先生}

少しでも健康格差を 小さくするために

国立国際医療研究センター国際医療協力局は、開発途上国を始めとした世界各国の医療の質向上や健康増進のために様々な支援を行っています。支援は乳幼児死亡率の削減や、妊産婦の健康改善など多岐にわたりますが、その中で感染症対策を中心に活動に取り組んでいる蜂矢正彦先生にお話をうかがいました。



1989年東邦大学医学部卒業、小児科医として診療にあたる。2002年より海外に渡り、公衆衛生のフィールドワーク、研究を開始。2005年ハーバード大学公衆衛生大学院修士課程修了。同客員研究員、マサチューセッツ州保健局を経て、2006年より現職。WHO(世界保健機関)のIPAC(予防接種の実施に関する諮問委員会)委員も務める。

ユニバーサル・ヘルス・カバレッジ

「ユニバーサル・ヘルス・カバレッジ(UHC)」ということばがあります。すべての人が、適切な健康増進、予防、治療、機能回復に関するサービスを、支払い可能な費用で受けられることを意味します。蜂矢先生が携わるのは、このUHCの実現を目指す活動です。

蜂矢先生は、中国やラオスの少数民族になぜ予防接種を受けないのか聞き取り調査したり、コンゴではエボラ出血熱に対応する医療従事者に指導をしたりと、この十数年で20〜30か国に渡り、UHC実現のために貢献してきました。

調査研究から課題を発見する

ラオスでは現地の政府との共同で、約2千名

を対象に麻疹(はしか)・風疹混合ワクチンによる予防接種がどれくらい効いているか調査しました。予防接種を受けると、体内にその病気に対する免疫ができます。ところが、蜂矢先生のチームが予防接種を受けた人の麻疹・風疹への免疫状態を調べたところ、風疹に対する免疫はついているものの、麻疹に対する免疫がない人がたくさんいることがわかりました。風疹ワクチン成分に比べて麻疹ワクチン成分は温度変化に弱く、一定の温度を超えると効果がなくなってしまう。管理状態の悪さが、予防接種を受けたのに抗体ができていないという状態につながっていたのです。

そこで、ラオスの保健省、WHO(世界保健機関)やユニセフに対し、ワクチンをきちんと冷えた状態で輸送・保管できる設備を整えよ

医療 Q&A

通勤途中に急にお腹が痛み、
トイレに駆け込むことが多いです。
病気でしょうか？

(大田区、24歳、男性)

Q

感染性腸炎など内科的疾患の可能性もありますが、その場合、多くは発熱や倦怠感や体重変化などをともないます。一度、内科での相談や診察を受けるとよいでしょう。リラックスしているときにはお腹の症状がみられないようでしたら、過敏性腸症候群(irritable bowel syndrome: IBS)が考えられます。



特に若い人の1割ほどにみられる状態です。直近3か月間に、月に3日以上にわたってお腹の痛みや不快感が繰り返し起こり、排便によって症状がやわらぐ・排便の回数が変わる・便の形状(見た目やかたさ)が変わる、などがあるとIBSと診断されます。

食事の変化や腸の感染で炎症が残り、腸内細菌の変化などで消化器粘膜の過敏性が強くなった状態です。また、消化管の動きは自律神経でコントロールされるので、そのときの緊張やストレスとも関連があるでしょう。胃腸の収縮運動が強くなり、痛みの知覚過敏が強くなっていることも考えられます。

食事の回数や量、また、食べるスピードの工夫で改善することもあり、腸のけいれんを緩和する薬などで治療することもあります。

(東京都医師会 広報委員 石井 一平)

う、と呼びかけました。するとその後、ラオスでは麻疹患者が目に見えて減っていききました。「我々が行った調査結果によって解決すべき課題がわかり、患者数が減った。人の健康に役立てたことが実感できた体験でした」と蜂矢先生はうれしそうに語ります。この実績から、ほかの国からも同様の調査依頼があり、今後取り組みが広がっていく見込みです。

無理をしすぎない

蜂矢先生には、世界各国と一緒に仕事をする仲間がいます。10名ほどの部下からの報告や相談の連絡も、時差の関係で24時間届きます。「それに、できるだけ早く対応できるようにしています」というから大変そう。ところが、「全然大変ではありません。仕事はたのしいですから」と笑顔で話します。

ただし、海外に渡ることが多いからこそ気をつけているのは、無理をしすぎないこと。「無理をすると不注意になり、マラリアの予防薬を飲み忘れたり、スリや強盗にあつたり、野犬に噛まれたりしかねません。だから、常に元気な状態であるようにしています」と蜂矢先生。十分な睡眠を取り、飲みすぎたり食べすぎたりしないなども、「無理をしすぎない」ひとつです。

決断を後押しした旧友の存在

蜂矢先生はもともと、日本国内で診療する小児科医でした。そのころから医療が行き届かない人がいることについて問題意識を持ち、小児医療が不足しているエリアでも働きました。

小児科医として働いて十数年が経ったころ、先輩の紹介でモンゴルでの勤務経験がある人と知り合い、自分もモンゴルで働かせてほしいと

売り込んだところから、蜂矢先生の広く人々の健康に貢献する活動が始まります。ある程度の経験を重ねたタイミングで新しい世界に飛び込むという勇氣ある決断の裏側には、旧友の存在がありました。「ちよūdごそのころ、高校時代の友人が相次いで大手企業を辞めて、フリーライターやプロミュージシャンになりました。それが自分もチャレンジしたいという気持ちの後押しになったと思います」と教えてくれました。

健康格差を少しでも小さくしたい

目指すのは、世界で、そして日本国内においても、少しでも健康格差を小さくすることです。麻疹に限らず、健康問題はその背景を調べてみれば解決できることも多いはずだと蜂矢先生は考えます。

「今年はいろいろな国で少数民族の人々に会い、話を聞きたいです。たとえば、無料でワクチンが受けられるのに、なぜ保健センターに行かないのか、理由を聞きたい」と蜂矢先生。「そこから世界中の少数民族に共通する課題と解決の糸口が見つかるはず」と熱い思いを語ります。それを世界に向けて発信し、解決に向けて取り組む仲間を広げていくというビジョンが、

今日も蜂矢先生を突き動かします。



ラオスでのフィールドワークの様子。保健省の予防接種課長がワクチン接種の確認方法を説明しているところ。(2010年12月ラオス人民民主共和国チャンパサック県)

連載コラム

大人の予防接種 (2) MR(麻疹・風疹)ワクチン

国立国際医療研究センター 国際感染症センター
トラベルクリニック医長 予防接種支援センター長

氏名 無限

麻疹と風疹の特徴

昨年は子どものころに予防接種を受けていない人が増えたことなどにより、麻疹(はしか)の患者数が世界的に増加して前年比で約2倍、日本国内でも患者数が過去10年で最多となりました。麻疹のウイルスは空気感染するためもっとも感染力が高い病原体で、特に乳幼児で重症化しやすく、2018年には世界で推計14万人以上が亡くなっている怖い感染症です。他方、風疹の感染力や重症化は麻疹ほどではありませんが、妊娠初期の妊婦さんが感染すると、目、耳、心臓などに生まれつき問題がある先天性風疹症候群の赤ちゃんが生まれてくる場合があります。昨年も4名の報告がありました。

予防方法

麻疹も風疹も、予防接種を2回受けておくことでほとんど

の場合に予防できます。子どもの定期接種は1歳と就学前の1年間(年長さんは3月末まで)が対象です。確実に予防接種を受けるようにしましょう。

また、41~57歳(2020年4月1日時点)の男性は小児期に風疹の予防接種を受ける機会がなかったため、免疫が十分でない人の割合が高く、流行の主な原因となっています。そのため、国は夏のオリンピック・パラリンピックに向けた特別な感染症対策として、対象年齢の男性は2021年度末まで無料で風疹の免疫の検査や予防接種を受けられることになっています。市区町村から送られてくるクーポンを受け取ったら、指定の医療機関に相談しましょう。

